



田老漁港のすぐそばに建てられた田老町漁協の仮工場では塩蔵ワカメの包装が進む。

## リサーチ「被災地のいま」

### 生産現場～岩手県沿岸部

岩手県沿岸部。水産業も水産加工業も施設面の再建を進め、震災前の取引へ戻す努力をしています。ワカメ養殖施設を復旧し奮闘を続ける田老町漁協<sup>※1</sup>、その養殖ワカメを加工する古須賀商店<sup>※2</sup>、工場を新設し、酒づくりを再開した大槌町の赤武酒造<sup>※3</sup>を取材しました。



盛岡市内で事業を再開させた赤武酒造の古館秀峰社長。  
(写真提供:赤武酒造)



同じく田老漁港すぐそばに建設された昆布の乾燥施設。

施設の再建は進むが……  
岩手県の太平洋沿岸、宮古市では古くから水産業と水産加工業が発達していました。  
市街地から北へ約15kmの田老地区では、巨大な防潮堤の海側にいくつものプレハブ施設が立ち並びます。防潮堤を乗り越えてやって来た津波は町に大きな被害をもたらしましたが、その直後から地元の田老町漁協は水



田老町漁協の養殖ワカメを原料に、加工品の製造を進める古須賀商店。

産業の立て直しを図り、11年秋には439台のワカメの養殖施設が完成。陸上の加工施設の建設も進め、12年春には震災発生前の7割まで養殖ワカメの収穫を復活させました。  
誰もが待ち望んでいた養殖ワカメ、地元の水産加工業者も同様です。その一つ、宮古市の古須賀商店では11年は天然ワカメで何とか「茎わかめ生姜漬け」を作りましたが、12年からは、震災前と同様、養殖ワカメで商品の生産を再開することができ、胸をなでおろしています。  
しかし、課題は山積しています。施設の再建はできても、田老町漁協も古須賀商店も取引先は以前に比べて大きく減ったままです。生産できなかった1年のブランクはあまりに大きかったです。

### 時間がかかる町の復興

大きな被害を受けた田老地区や宮古港近くの銚ヶ崎地区<sup>くわがさき</sup>では、町そのものの復興計画ができたばかりで、これから長い時間をかけて区画整理を進めなければなりません。建設資材の不足も予想されています。

困難の中、多くの事業者が自力で立ち上がってきました。宮古市の南、大槌町で酒蔵を営んでいた赤武酒造もその一つです。他の酒蔵から蔵を借りて日本酒を造るという異例の方法で清酒「浜娘」を復活させた一方、2年の歳月をかけて盛岡市内に酒蔵と工場の建設を進め、この6月に生産をスタートしました。経済産業省からの補助金だけでは足りず資金調達に駆け回り、ただでさえ大変な中、返済の重圧も加わりました。それでも、いつの日か大槌町へ帰る日を願って、お酒を造り続けます。

(文・写真 山本明文)

- ※1 いわて生協が1975年から供給してきた産直の「真崎わかめ」の産地。12年3月に供給が再開された。
- ※2 産直「真崎わかめ」の中芯を使った、いわて生協PB商品「アイコープ産直真崎わかめ味付茎わかめ」などを製造している。
- ※3 生協とは古くからの付き合いがあり、東北地方の生協で取り扱う「CO・OP虹の宴」を製造していた。被災後に他社の蔵を借りて製造した「浜娘」は、いわて生協・東北サンネット事業連合・コープネット事業連合等で供給された。